

第4回歯科医学教育者のためのワークショップ研修報告

河野 博史

鹿児島大学医学部・歯学部附属病院 歯科総合診療部

期日：平成25年12月12日～15日（3泊4日）

場所：富士教育研究所

主催：日本歯科医学教育学会

後援：文部科学省・厚生労働省・日本歯科医師会・日本歯科医学会

はじめに

今回、歯科生体材料学分野の菊地教授と共に、第4回歯科医学教育者のためのワークショップに参加する機会を得たので報告を行うこととする。本ワークショップは通称「富士研」と呼ばれるもので、医科（日本医学教育学会主催）では今年で40回を数える。歯科（日本歯科医学教育学会主催）に於いては一時中断を経て平成22年度の再開時を第1回とし、今年が4回目とのことである。本ワークショップの趣旨を以下に記す。

良質な歯科医師養成への努力に資するために、卒前・卒後の歯科医学教育を担当する歯科大学・歯学部の教員と臨床研修に携わる指導歯科医が一堂に会し、成人教育分野における概念や手法を取り込みつつ、卒前教育や臨床研修の指導に係わるニーズに沿った検討を行い、積極的な討議と体験を通して、実践的な教育の在り方を提示することを目的とする（「ワークショップの趣旨」より抜粋）。

1日目

本ワークショップの参加者は40名（教員35名、開業歯科医師5名）であった。初日は受付および参加者の写真撮影後、開講式が執り行われた。引き続き、文部科学省高等教育局医学教育課：平子哲夫企画官の「歯学教育の現状と課題」に関する講演を受講。その内容は1.歯学教育を取り巻く環境、2.歯学教育の改善・充実、3.歯学教育認証制度等の実施4.その他（参考）という構成であったが、日本が超高齢社会を迎える中での歯科治療需要に対する将来予想に歯科医師の需給

問題を絡め、かなり深刻な言及が行われた。また、国民から信頼される歯科医師を養成するために、必要な臨床能力を確保するための方策およびコア・カリキュラムに関しての言及があった。認証制度に関しては、これまでの経過の概要と今後の展望について説明がなされた。次に、厚生労働省医政局歯科保健課：高田淳子歯科医師臨床研修専門官の「臨床研修からはじまる生涯研修」講演を受講。こちらは1.歯科保健医療等の現状、2.歯科専門職の資質向上検討会、3.新たな専門医に関する仕組みについての講演であった。社会背景に関する話は先の講演と同様の内容であったが、厚生労働省が歯科医師の質を担保するために取り組んでいることに関して、現状および今後の展望の話があった。両講演後に研修が本格的に開始され、概要説明およびアイスブレイキングとしての他己紹介が行われた後、ワールドカフェの形式で歯科医学教育へのニーズについて対話を行った。本手法はメンバーの組み合わせを変えながら話し合いを継続することで全員が話し合いを行っているような効果が期待できるというもので、今年から始まった東京大学医学部5年生に対する地域医療実習でも採用報告のある手法である。夕食をはさみワールドカフェで抽出されたニーズをカリキュラムに落とし込むための方法に関するセッションが行われた。ここでは抽出されたニーズを分類し、その信頼性を検証、ニーズの根本原因・背景を踏まえて学習の対象者および学習環境設定するといった一連の作業を行った。最後に第1日目の評価を実施し、初日のスケジュールは終了となった。しかしながら、研修施設1階に「ミニバー」なるものが設置され、有志

参加者による歯科医学教育に対するの熱い討議が深夜まで続けられた。

2日目

朝6時半より、「富士研」恒例となっているという「赤富士詣で」（有志による）に参加した。初めて間近に見る富士山は壮麗で、さすがに世界遺産に登録されているだけのことはあると感じられた。暫くすると、山頂から赤く色づいていく様子をはっきりと観察することができた（写真1）。葛飾北斎の富嶽三十六景、凱風快晴に描かれている「赤富士」を生で観ることができたのは、ちょっとした感動であった。ただ、桜島も「勝るとも劣らず」ではないかと思ったのも、私が鹿児島出身だからであろうか。



写真1：赤富士詣で

朝食後、2日目の開始として「歯学教育認証評価について」の講演が行われた。医学部での2023年問題の影響から最近あちこちで耳にする認証に関する話題であったが、欧米諸国の大学教育と比して、とかく入り難く出易いと揶揄される日本の大学教育の質を担保していくために非常に重要な事項ではないかと考える。東南アジア歯科医学教育学会（SEAADDE）との連携の先には、EU域内のように歯科医師免許の相互認証が行われることが有り得るのだということを再認識することとなった。講演後、初日の最終セッションのグループ発表が行われ、次いで「学習目標プロジェクト作業」のセッションが開始された。ここでは初日に抽出したニーズから学習目標を設定するというのがテーマであった。指導歯科医師講習会でも同様のものが行われているが、一般目標（GIO）および個別行動目標（SBOs）をB. Bloomのtaxonomyによる知識、技能、態度の3領域に渡るように設定する作業を行った。作業前の説明では、教育目標の持つべき性格とし

て「RUMBAの法則」について言及がなされた。昼食後、各グループが設定した学習目標に関して全体討論を行い、「学習方略プロジェクト作業」へと進んだ。方略のセッションではR. Hardenらが1984年に提唱した「SPICESモデル」の説明があり、学習目標がtaxonomyで分類したどの領域に属するかにより各々に適切な学習方法があるということを確認しながらの作業となった。また、どのように学べば学習定着率が高いのかを示す「学習のピラミッド」なども考慮して、先のセッションで設定したSBOsをどのように達成させるのかを討議した。ここでは決定した学習方略に対して、グループ内で適正と判断されれば自由に学習資源を設定していったのであるが、現実には人的資源および予算の都合で実施できる方略が制限されることは想像に難くないところである。全体討議では、各グループで設定した項目に対し実際実施可能であるかを踏まえて質疑が行われた。2日目の最後は「上手な3分間プレゼンテーション」というセッションであった。まず、事前に各人が用意したプレゼンテーション（テーマは自由）をグループ内で行い、その後効果的なプレゼンテーションを実践するために必要な事象に関する説明を受けた。それから各人がプレゼンテーションをブラッシュアップして再実施の上グループ代表を選出し、その代表が全員の前でプレゼンテーションを披露するというものであった。既に最初のグループ内でのプレゼンテーションからレベルが高く感心しきりであったが、各グループ代表者によるプレゼンテーションは非常に個性的で、極めつけにマイク1本で「これぞ天下の上杉節」（米沢上杉まつりのパレードに採用されている上杉謙信公の歌で、地元の方は皆歌えるらしい）を披露したものであった。歌を披露したプレゼンテーションは、「富士研」初とのことであったので、ある意味貴重な体験ができたのかもしれない。惜しむらくは、全員のプレゼンテーションを見ることができなかったことであるが、参加者全員が3分間プレゼンテーションを行うと、それだけで2時間を要するので致し方ないといったところであろうか。第2日目の評価をもって、この日のプログラムが終了となった。初日に引き続き「ミニバー」に出向いたところ、お互いの気心が知れてきたこともあり、初日よりさらに熱い討議が繰り広げられた。

3日目

2日目に続き、「赤富士詣で」に参加した。参加は有志であるにもかかわらず、結構な人数が集まってい

た。この日は風が穏やかで眼前の貯水湖面に「逆さ富士」が映し出されており(写真2)、前日とは違った風情を味わうことができた。



写真2：逆さ富士

3日目は本学の田口則宏教授による「アウトカム基盤型教育」の講演から始まった。これまでの2日間て学んだ「教育者が何を教えるか」ということに比して、こちらは教育を終了した時に習得が期待されることをまず定義し、そこに到達し得る教育を提供していくという考えのものであるとのこと。知識、技能、態度を包括した competence の概念について触れられていたが、以前本学部紀要で報告させて頂いた「医学教育専門化養成を目指したパイロットコース」では、欧米では competence で能力を評価することが一般的であることについて言及されていたし、先日本学医学部で開催された岸田明博先生による総合臨床研修センター特別講演会においても、米国の医師研修における 6 competencies の重要性が強調されていた。さらに Dundee 大学医学部で使用されている three-circle model (正しいことを、正しく、正しい者がする) の解説があり、今後はより「アウトカム」に注目する必要があるとの講話がなされた。因みに医科の「富士研」ではこの「アウトカム基盤型」のワークショップを行うために、歯科より1日長い4泊5日の研修になっているそうである。講演後のセッションは「学習評価」についてであった。前セッションまでに作成したグループの学習ユニットの SBOs に関して、何のためにどのような評価を行うのかを設定していく作業を行った。グループで「評価」の目的、対象、評価者、時期、評価方法を設定していったのであるが、作業中に教育用語の定義を確認することがしばしば必要であった。その中で、参加者が一番問題としていたことは「総括的評価」に関してであったように思う。この「総括」とい

う言葉が曲者で、あたかも全ての SBO 毎に「総括」の評価を行わねばならない、あるいはそこまでいかずとも学習ユニットの最後には必ず「総括」評価を実施すべきである、といったような錯覚を起こさせるようである。このセッションを通し、「形成的評価」と「総括的評価」の定義について教育者は正しく理解しておく必要があると感じた。評価は学習者にとってかなりの影響を与えるものであり、また教育の質を担保する上でその妥当性、信頼性、客観性等を鑑みることは必要不可欠であると考えた。ここまでの、グループで抽出した教育ニーズを学習目標に落とし込み、学習対象者を設定した上でその学習方略を決定し、評価が実施できるようにするという、一連の流れを構築する作業は終了した。昼食後のセッションでは「インシデント・プロセス」という、私にとって初体験の内容の作業が行われた。「インシデント・プロセス」法とは、事例研究法の一つで、1. 実際に起こる問題を解決するための判断力や問題解決能力を養うことができる、2. 情報の収集や分析の重要性を理解できる、3. 討議の過程を通じて参加者が互いの意見を尊重し、話し合い、共に考えることの重要性が理解できる、といった効果が期待できるものとのことであった。ここでは参加者が事前に提出した報告書の中から適当な事例をタスクフォースが決定し、その事例を提出した参加者が情報提供者となって全体説明および質疑応答を行った。その後各グループが理想的な対応についての検討を行い、まとめとして振り返りが行われた。これで全てのセッションが終了し、残すは講演のみとなった。「医療コンフリクトマネジメント」の講演では、認知フレームの解説があり、それを踏まえて医療メディーエーターによる医療紛争に対するマネジメントの概要が説明された。このような内容の講演が設けられているということで、医療紛争が増加してきている社会背景を実感させられた。

3日目の最後は JAXA の川口淳一郎先生による「はやぶさから学んだこと」の特別講演であった。実はこの「はやぶさ」は、去る7月に北海道で開催された歯科医学教育学会の特別講演で同じ JAXA の阪本成一先生の話をお聴きしており、またその内容が素晴らしかったために全く期待していなかったというのが正直なところであった。ところが、いざ講演が始まってみると、その巧みな話術と含蓄のある話に、あっという間に講演時間が過ぎ去ってしまった。同じ「はやぶさ」の話で2度も感銘を受けるとは全く思いもよらなかったことであり、世界のトップを走っている人はさすが

に違うと、敬服することしきりであった。先生の信条という、「どんなに足下を固めても、高いところに上らなければ水平線は見えて来ない」は、まさに「アウトカム基盤型教育」を推進していくことに結び付くと強く感じた。本来、川口先生への講演依頼は200人以上の聴衆でないと受け付けて貰えず、今回はタスクフォースの葛西先生の人脈で特別に依頼を引き受けて貰えたとのことであり、非常に貴重な機会を設けて頂いたことに感謝する次第である。

第3日目の評価後には情報交換会ならぬ「醸泡交換会」が開催され、参加者全員で親睦を深め合った。ここまで、「赤富士詣で」や「ミニバー」を通して交流があったせいで、ワークショップの作業グループ以外の参加者とも大いに交流を図ることができたように思う。また、偶然にもこの日は菊地教授の誕生日とのことで、おめでたい雰囲気の中で遅くまで語り合いが行われた。

4日目

最終日、3日間連続で「赤富士詣で」に参加。日頃の行いが良い(?)せいか、3日間好天に恵まれたのは幸いであった。朝食後、「赤富士詣で」仲間とTV撮影に使用されたりするという「メタセコイヤの並木道」(写真3)へ散策に出掛けた。早朝の冷たい空気の中、並木道越しに研修所の建物を見ていると、いよいよ研修も最後のだと感慨深いものがあった。



写真3：メタセコイヤの並木道

最終日は、まず高知大学の瀬尾宏美先生による「チーム基盤型学習 (TBL)」の特別講演が行われた。講演と言いつつグループ作業が設けられていたのであるが、この「TBL」に関しては参加者の興味が非常に高いものがあり、講演後に活発な質疑が行われていた。問題基盤型学習 (PBL) の実施には多くの人的資

源が必要であるのに比べ、TBLでは基本的に1人の教員でユニットの全てを担当することが可能であるとのことで、導入に際し人的資源および設備面で非常に魅力的な学習方略であるように感じた。次に本ワークショップの最後として、日本歯科医師会の中島信也常務理事による「日本歯科医師会の考える生涯研修」の講演があった。世界に類を見ない高齢社会の日本において歯科医師の社会的責務は増大していくものであり、日本歯科医師会は広く国民に信頼されるべく生涯研修を推進していくとのことであった。

以上で全ての日程を終了し、閉講式が執り行われた。参加者一人一人が感想を述べた後、修了証書を授与されたのであるが、例年「疲れました」といった類の感想が多いと話があった中、今年は「最高のグループに参加することができた。」といった感想が多々見受けられ、この研修が非常に充実したものであったことを裏付けていたように感じた。今回お世話になった参加者の方々には感謝の念が尽きず、今後も機会があればぜひ一緒に仕事をさせて頂きたいと強く願う次第である。

尚、来年度の「富士研」は「アウトカム基盤型教育」の重要性を考慮し医科と同様に4泊5日となるとのことで、研修の更なる充実が図られていることを報告申し上げます。

まとめ

「井の中の蛙、大海を知らず。」、自分が思っている以上のペースで歯科医学教育に対する環境が変化しているということを感じた4日間であった。本ワークショップを修了して、改めて「正しいことを、正しく、正しい者がする。」ということを実践していくことが肝要であるとの思いが強まった気がしている。私が所属している歯科総合診療部は学部の歯科医学教育実践学分野と連携しており、その意味で鹿児島大学歯学部および附属病院歯科研修の教育が適切に行われるような環境作りに貢献することが職務であると考えている。来るべき国際標準化基準に耐え得るように教育の質を担保し、歯学部生が歯科医師臨床研修まで一連の流れで学ぶことができるような環境を構築することに貢献していきたい所存である。そのために、今後も積極的に歯学教育に関する最新の情報を取得し、それをFD、大学紀要等を通して広く学内に還元できるように邁進していきたい。

最後に、本ワークショップ参加の機会を与えて下

さった歯科総合診療部部長の田口則宏教授と、この研修報告の鹿児島大学紀要への掲載を許可して頂いた歯科矯正学分野の宮脇正一教授に厚く御礼を申し上げます。

参考文献

- 1) J. A. Dent, R. M. Harden: 医学教育の理論と実践, 第1版, 篠原出版新社, 東京, 2010